

# 助け合ってこそ社会





私たちは社会生活を営むかぎり、人とのかかわりやつながりなしには生きていけません。他人から親切や援助を受けたり、反対にみずからの力を社会のために提供したりして生きています。社会の中で暮らす私たちは、持ちつ持たれつ、助け助けられる関係の中にいると言えるでしょう。

今月号では、社会の中の助け合いについて考えます。

# 情けは人のためならず

本来は、「他人に情けをかけると、いつかめぐりめぐって自分のためになる」という意味ですが、昨今では他人を助けたり、世話することは、あまりよいことではないと考えられているのでしょうか。

以前、文化庁が行った「国語に関する世論調査」の中で、「情けは人のためならず」という諺が、「情けをかけることは相手のためにならない」と理解している人のほうが多いということが発表されて、話題になりました。





# 見ず知らずの人から贈り物

「情けは人のためならず」という諺を、まさに体験したような話をKさんから聞きました。

福井県出身のKさんは、地元の高校を卒業すると東京の専門学校に進学しました。経済的に大変な苦勞がありました。勉強に励み、そのまま東京で就職。やがて、Kさんは結婚し、娘さんが生まれました。Kさんの人生は、順風満帆でした。娘さんが小学校に入学するとき、細菌の感染による扁桃腺炎にかかり、四十度の高熱が続いたそうです。医師の診断は、「扁桃腺の熱だから大丈夫で、すぐに下がります」というものでした。ところが





五日目、娘さんの全身が土色つちいろに変わりはじめました。あわてて病院で検査をする  
と、腎臓じんぞうが細菌おかに侵され、尿毒症にようどくしょうを起こ  
していたのです。

病院の医師の診断は、「命の保証はでき  
ません」という厳しいものでした。入院  
しての懸命けんめいな治療の結果、幸い、一命を  
とりとめて退院することができましたが、  
重い後遺症こういしょうが残り、その後も治療が続け  
られることになりました。再度の入院も  
あり、時には生死せいじの境さかいをさまようことも  
ありました。

治療を続ける娘さんが中学校に進学す  
るころ、Kさんに見ず知らずの人から荷  
物が届きました。中には木の根つこのよ  
うなものと、次のような内容の手紙が  
入っていました。



# 親の善行に救われたKさん

「戦後すぐ、私たちは食べる物が無くなり、飢え死にしそうになりました。そんなとき、あなたのご両親から食べ物をおいただきました。それによつて私たち家族は命をつなぐことができました。そのことを忘れずに思っていました。

娘さんが大変な病気で苦しんでおられ

手紙を読んだKさんは、遠い昔の両親の姿を思い浮かべました。

—— Kさんの両親は、結婚して十六年間、子どもに恵まれませんでした。そのためにKさんが生まれるまでの間、五人の子どもを養子として育てていました。

るとうかがつたので、これをお送りします。生だと毒ですから、薄く切つて一月ほど日かげに干して、煎じて娘さんに飲ませてあげてください」

送られてきたのはヤマゴボウと呼ばれる漢方薬の一種でした。

父親は軍医でしたが、戦地でマラリアを思い、戦後は体調が悪く職に就けませんでした。そのため母親は畑を借りて耕し、内職の機織をしながら生計を立てていました。そのような状況でも、仏教に帰依する両親は他人に尽くすことを惜し



みませんでした。

戦後の混乱期、Kさんの両親は、満足に食えることができない人たちを自宅に招き、食事を与えていました。昼食時にもなると、六、七人が家に集まり、食事が終わると、帰りにはおにぎりや味噌<sup>みそ</sup>などを提供していました。苦しい生活の中でも、両親は「私たちにできるときには、させてもらおう」と言って実行していました。そのような両親の後ろ姿を見て、Kさんは成長したのです——

見ず知らずの人からの贈り物と両親の姿がつながりました。六年間、薬<sup>わづ</sup>にもする思いだったKさんは、手紙に書かれていたことを実行しました。

やがて、娘さんの症状は少しずつ改善していきました。もちろんいくつかの医

学的な条件も重なったのでしようが、医師が驚くほどの回復ぶりでした。

Kさんは、こうした経験によって、両親が困っている人々を助けたことが、自分の娘を救ったように思うようになりました。Kさんは両親の思いに深く感謝するとともに、みずからが受けた善意に報いるために、今度は自分が善意の恩返しをする決心をしました。今では、さまざまな社会貢献やボランティア活動に励んでいます。

Kさんのように、本人や周囲が気づく例は稀まれかもしれませんが、他人への親切や善意は、相手に喜びを与えるだけでなく、さまざまに形を変えて、めぐりめぐって、みずからに戻ってくるのではないのでしょうか。



私たちの先人は、そのことに気づいて、諺や教訓、また家訓かこんとして伝えてきています。

# 売り手よし、買い手よし、世間よし

古くから日本の各地には、他人への善行や社会貢献を積極的に行った人々がたくさんいます。

江戸時代、近江おうみの国（現在の滋賀県）に現れた近江商人は、全国各地で商売を行うとともに、たくさんの方々の社会貢献を積極的に行いました。

近江商人の考え方は、「売り手よし、買い手よし、世間よし」という「三方よし」という言葉に表されています。彼らは、商売は売る側と買う側だけが利益を得るのではなく、周りの人々の幸福にもつながらなければならぬ、という考えを持っていました。

当時の近江商人が書き残した家訓が今も数多く残っています。その中から一つを紹介します。

「人の人たる務つとめを大切に心がけるために申し伝える。恩おんを忘れず、神仏しんぶつのご加護かごを信じて、慎み敬うやまうこと。決しておごり高ぶることなく、他人の苦しみを思いやり、他人の喜びを楽しみとして、自己の欲を抑おさえて、貧しい人々を憐あはれみ、自分の力に見合った救済をするならば、天の道理どうりにかない、世間の人々に受け入れられるだろう。商売の道もそこにある」

（中井家の家訓「中氏制要」を現代的に意訳）  
これは代表的な近江商人の一人である





中井源左衛門が自分たちの考えを子孫に伝えるために書き残したものです。中井家では、この家訓のとおり、橋の架け替えや石道路の敷設、常夜燈の設置や神社仏閣への寄付などを積極的に行いました。

中井家にかぎらず多くの近江商人たち

も、凶作の時には米やお金を人々に提供し、不況時には、あえて豪華な家を建てて雇用と需要をつくりだす「お助け普請」などを行いました。

このような心得を続けていたおかげで、百姓一揆の「打ちこわし」のときでも災難を免れた商家があります。また、このような商家は、百年以上たった現在でも老舗として商売を続けています。

近江商人は、人として大切な務めは恩を忘れずに、社会にお返ししていくことが商人の生きる道であることを、代々の経験から身に付けて、実践していたのでしよう。自分たちの商売ができるのは、相手だけでなく、社会の人々のおかげであると自覚していたのです。

# 二宮尊徳の 道徳と実践

さらに日本には、他人や世間のために  
尽くし、人々の生活を向上させた例があ  
ります。



江戸時代末期の農政家・二宮尊徳（二七  
八七〜一八五六）は、疲弊ひびし切った農村を  
復興させ、人々の生活を経済的だけにな  
く、精神的にも豊かにしました。復興し  
た村々は、それまで遊んでいた人たちが  
真面目まじめに働くようになり、荒地あれちが田畑に  
変わり、温かい雰囲気ふんいきに包まれていまし  
た。

約六百もの農村を救済した尊徳は、い  
くつかの具体的な方法を人々に奨励しょうれいしま  
した。その中でも重視したのが、「推譲すいじやう」

と呼ばれる、人々からの資金の提供です。これは、各自が収入の中から、ある一定の金額だけで生活し、余ったお金を貧困に苦しむ人々の救済や、荒地開発の資金に提供するというものです。

農地が増えて農作物の収穫量上がり、結果として人々が豊かにな

り、めぐりめぐって資金を提供した人たちの利益にもつながるといふものでした。尊徳は、このような方法で村落をよみがえらせていきました。

尊徳は次のように述べています。

「身近なたとえを引けば、この湯ぶねの湯のようなも



のだ。これを手で自分のほうへかき寄せれば、湯はこちらへ来るようだけれども、みな向こうのほうへ流れて返ってしまふ。これを向こうのほうへ押ししてみれば、湯は向こうのほうへ行くようだけれども、やはりこつちのほうへ流れて返る。

(中略)

人間の手は自分のほうに向いて自分のために便利にもできているが、また向こうのほうへも向いて向こうへ押せるようにもできている。鳥獣の手はこれと違って、ただ自分のほうへ向いて自分に便利ないようにしかできていない。

人と生まれたからには、他人のために押す道がある。それを、わが身のほうへ手を向けて、自分のために取ることばかり一生懸命で、先のほうに手を向けて他



人のために押すことを忘れていたので、人であつて人ではない。鳥獣と同じことだ。なんと恥ずかしいことではないか」(大貫章著『二宮尊徳の道徳と実践』モラロジー研究所刊)



# みずからの力を社会に

寄付やものを提供することだけが、他の人や社会への恩返し、社会貢献ではありません。身近な人に働きかけることから、社会や人々に尽くすこともできます。

曹洞宗をひらき、永平寺の開祖となつた道元禪師（一一〇〇～一二五三年）は、自

分が幸せになりたいと思うならば、他人を幸せにすることであると説き、そのために四つの方法を示しています。

一つ目は、「布施」です。相手に喜んでもらうために、自分の持っているものや知識を提供することです。

二つ目は、「愛語」です。これは相手に温かく優しい言葉をかけることです。

三つ目は「利行」です。多くの人々に利益となるような行為をして、喜んでもらうことです。

四つ目は、「同事」です。これは相手と協同で作業をすることです。（『正法眼蔵』

「四摂法」より）

これらの四つは、何も難しいことではなく、電車の中でお年寄りに席を譲る、道々を尋ねられたら親切に答える、家族や周りの人々に明るい挨拶をするなど、社会で暮らす私たちにとって基本的なモラルばかりです。大切なことは、このような行いができることに感謝し、喜びの心を持つことでしょう。



そして、一人ひとりの小さな親切や善行が社会に広がっていき、温かく住みやすい社会をつくりまします。

※ ※

私たちは人とかかわりの中で生きていくかぎり、周りの人々の世話や助けを受けるものです。たとえば、道路や電気・ガス・水道などの公共財を利用し、教育や福祉などの公共のサービスを受けていない人はいないでしょう。これらは今日の社会では、当たり前のように考えられています。すべて先人が時間と労力を使って、試行錯誤した結果として得られたものです。つまり、私たちの日々の暮らしの中のどの一つを見ても、常に先人の恩恵や周りの人々からの世話や助けを受けていると言えます。

私たちは、持ちつ持たれつ、助け助けられる社会に暮らしています。言い換えれば、迷惑をかけたなり、かけられたりする関係の中にいます。時には自分では気がつかないまま、他人に迷惑をかけることもあるでしょう。

大切なことは、そのような関係の中にいることを自覚することです。そのことを自覚したとき、私たちは多くの恩恵に対する感謝の心とともに、身近なところから積極的に人々に働きかけ、自分のできることで社会に貢献したいという心が生まれてくるのではないのでしょうか。

一人ひとりのそのような積極的な働きかけが、明るく温かい社会をつくる原動力となり、めぐりめぐって、みずからの幸せにつながっていくのです。



ボクはこんなに恩恵を受けていたのだ!

